

「韓国」という名のバス

川瀬 貴也

一九九九年三月から十ヶ月間、韓国の馬山にある短大で日本語教師として働きました。「留学」ではありませんが、韓国という異国で感じたことと、私が目にした宗教がらみの事件を、徒然なるままに書いてみたいと思います。

1.

まず、私が働くこととなった昌信（チャンシン）大学について紹介したい。この大学は一九九一年に開校したばかりの新しい学校だが、その母体の昌信高校の歴史は長い。この高校は一九〇八年に、オーストラリア長老会（プレスビテリアン）が創設したミッションスクールがその淵源である。朝鮮時代末の開港以来、キリスト教が医療と教育の両面から朝鮮半島に根を下ろそうとしたことは周知の事実だが、昌信高校もその一つであったわけだ。

昌信高校は、最近出版されたある本の中でも少し触れられている（竹国友康『ある日韓歴史の旅—鎮海の桜』朝日新聞社、一九九九年、一八八頁）。その箇所を以下に引用する。

たとえば、馬山には普通学校のほか、朝鮮人子弟向けの教育機関として、フランス人（カトリック系）の経営する「私立聖旨（ソンジ）学校」（生徒数五十三）、イギリス人（長老教会）の経営する「私立昌信学校」（生徒数百十三）があったことが記録されている（『馬山と鎮海湾』、一九一一年）。この昌信学校については、またつぎのような記録がある。

本校生に対し遺憾の念を懐（いだ）かしむるは、彼等生徒が職員に引率せられ他の公立学校生と共同動作に出て、公園に至りし場合、馬山神社に礼拝せざるのみならず、

さらに敬意を表することなく神前を素通りし、吾人同胞を憤慨せしむるの一事にあり。（諏訪史郎『馬山港誌』、一九二六年）

この記録からは、日本の植民地支配に抵抗する私立学校の存在意義がよく伝わってくる。実際、この私立昌信学校は、そののち、一九三七年十二月におこなわれた「南京陥落奉祝記念」の行事で、先の記録と同様に馬山神社への参拝を拒否したため、翌一九三八年に廃校処分を受けることになる。

ともかく、このようなミッションスクールなので、「大学でのご専門は？」「宗教学です」「じゃ、川瀬先生もクリスチャンですか」「いいえ、そうではないのですが」「ソウル大の宗教学科の先生は皆篤信なクリスチャンですよ」という会話を何度もする羽目になった。教授達の車には、キリスト教を象徴する魚のステッカーを貼っていることも多く、驚かされる。当然教え子の中にも熱心な信者の子は多く、その子だけ、日曜日の遠足に「教会がありますから」と行って来なかつたりする。ともかく、韓国のクリスチャンの熱心さには感心させられる一方だった。

2.

さて、我が家は勤務先が借りてくれたアパート。そこに同僚との二人暮らし。テレビはケーブルテレビで、NHKBSも入る。このチャンネルは私に最新の日本の情報を届けてくれたが、韓国語学習の妨げになった点も否めない事実だ（残念ながら）。韓国語の放送も勿論色々見たのだが、キリスト教系の放送が二局もあり、驚いた。一つは在米韓国人向けの放送局、もう一つはその名もCTV（Christian TVだろう）。共に熱狂的な教会の様子を写しており、最初は興味深く見ていた私も、

少し食傷気味になった。手を天に向けて、一心に、忘我の境地で祈る信者たち。一日中説教をしているのではないか、と思うほどの牧師たち。彼等の話は残念ながら殆ど聞き取れないが、それ故却ってエネルギーだけもろに伝わってくる。故に「食傷」なのだ。

韓国に来られた方は、夜の町に怪しく(?)光る赤や黄色の十字架をご覧になったことがあるだろう。その光景だけで分かるように、韓国の教会はあきれほど多い。信者の取り合いにならないのか、と思うが、やはりなっているようで、牧師の個人的資質(カリスマ、といっても良いと思う)に左右され、信者数が大きく上下するようだ。日本と韓国の教会の一番の違いは、この点かも知れない。

3.

韓国といえば、キリスト教の伸張ばかりが目につくが、仏教の勢力も大きいものである。世論調査では、依然として信者数の割合の一位(時には二位)を占めているのは仏教である(『韓国人の宗教と宗教意識』韓国ギャロップ、一九九八年など)。十一月に行われる大学修能試験(日本のセンター試験のようなもの)の際には、寺で子供の成功を一心不乱に祈る母親の姿が風物詩となっている。

釈迦の誕生日を祝う灌仏会(韓国はちゃんと旧暦の四月八日に祝う)には、全国の主な名刹が一斉に盛大な儀式を執り行い、それはテレビでも放映される。私はお世話になっている教授の家でその様子を見ていたのだが、教授の小学生のお子さんが「ねえ、どうしてうちではお祭りしないの? 友達のうちではやっているよ」と言った。その教授のお宅は監理教(メソヂスト)に所属するクリスチャンなので「うちはクリスチャンだろう? だから、他の神さまをお祭りすることは駄目なんだ」と教え諭していた。幾分早熟なお子さんは「あ、わかった、中国のことわざにある『忠臣は二君に仕えず、良妻は二夫にまみえず』ってやつだね」と言ったので、みなで思わず笑ってしまった。

4.

韓国では、五月半ばに大きな宗教がらみの事件があった。MBCというテレビ局にキリスト教系新宗教の信者が乱入し、放送を止めてしまうという事件が起きた。私は韓国語のニュースは殆ど聞き取れなかったので、友人から詳しいことを知ったのだが、乱入したのは「万民中央聖潔教会」というキリスト教系新宗教(新宗教、と断言してしまうことには少しためらいもあるのだが、あふれ出るエネルギーを目の当たりにするとやはり「新宗教」と言いたくもなる。そんなことを言ったら、韓国の多くの教会は「新宗教」ではないか、という声も聞こえてきそうだが、私にも実は何をもって「新宗教」と称すべきか、というのは韓国の事例を見ると揺らいでくる)の信者。30分以上もまともな放送が出来なくて、韓国テレビ史上かつて無い「放送事故」だったようだ。

乱入の理由は、お定まりのパターン(?)。MBCの「PD(プロデューサー)手帳」という番組があって、そこでこの教団の教祖の李某について噂されている「お金」やその他スキャンダルを放送しようとして、それを阻止しようとした信者が乱入したようだ(この放送については

http://www.mbc.co.kr/sisa_dacu/pd_book/script/990512.ht

を参考。ただし全部ハングルです)。

この教祖は、「自分はキリストの生まれ変わりだ」とか、これまたお定まりのことを言っていたようで、「偽り言者たちに気をつけなさい。彼らは羊の皮をかぶってはいるが」云々という聖書の言葉はどこへやら。そのほか、特殊なカメラ・道具を使って自分を「光」そのものとして映す演出をしたとか、17年間で信徒数6万5千を集めたとか、金粉をまいて生まれ変わりを演出したとか、故郷の井戸水を聖水としていたがその水は普通よりも汚かったとか、ラスベガスで数千万ウォンの賭博をしたとか、信徒に無茶な献金を強要していた等、色々報道されていた。映像を見るに、熱烈な祈祷と病氣直しを中心にした、ある意味で韓国の「典型的」な教会だったような気がするのだが……

韓国でもう一つ、宗教団体を扱った番組を見た。JMSという団体を取り扱った「それが知りたい」

という番組。JMSとは「Jesus Morning Star」の略とも、創設者であるジョン・ミョンソク師のイニシャルから、とも言われている。

どちらの番組も、脱会者のインタビューを中心に構成されており、その「異端性」「非道徳性」などをクローズアップする作りになっていたと思われる。

このような「暴露」的な番組の場合、どこまでが報道されるべきか、報道される側の反論をどれだけ放送するべきか、という問題も、これらの番組は提起していたが、「国民の知る権利」を最重要視するべきだという世論調査を掲げていた。意地悪な言い方をすれば、そのような世論調査の結果を味方に付けて、自分の報道姿勢を自己弁護していた、とも受けとめられるが、オウムを巡る報道などでも、少しは議論されて然るべき問題だったような気がする。

5.

韓国では、「生臭坊主」という意味で「日本坊主」という言葉がたまに使われるそうだが（これも植民地時代の「遺産」の一つ？）、今、韓国最大の仏教宗派曹溪宗で、内部抗争から、流血の惨事が発生している（このエッセイを書いている段階では未解決のはず）。「他人事」ながら、僧侶の社会的地位の低下に繋がるのでは、と心配してしまう。

ともかく、韓国では一般に聖職者の地位も高く、神聖視する傾向があるようだ。先日花村萬月氏の『ゲルマニウムの夜』が韓国語に翻訳されたが、聖職者のセックスシーンが問題となり、韓国のカトリック教会が一斉に反発、出版差し止めを求める事態に発展したことは日本でも報道された（「韓国が“発禁”扱った芥川賞受賞作！」、『週刊文

春』1999年6月17日号）。全てが「日本並」にならなくてもいい、と個人的には思う。

6.

韓国は宗教に限らず、様々な場面でエネルギーシユな側面を見せてくれるが、その一つが「狭い韓国、そんなに急いでどこへ行く」と言いたくなるほどの交通機関。韓国のバス、タクシーの運転の乱暴さも日本人観光客によって良く知られた事実であるが、その真骨頂は何と言っても市内バス、と呼ばれる市民の足だ。韓国はソウル・釜山を除くと鉄道網が発達しておらず、市民の主な交通手段はバスに圧倒的に依存している。私も勤務先までバスやタクシーを利用しているが、時々アナウンスも無し、あっても実際のバス停とずれていたりする、急発進・急停車は当たり前、というバスに揺られている（しかし、韓国人は揺れない。バスの中でグラグラ揺れているのは日本人の私くらいだった。これも韓国の「謎」の一つ）と「近くて遠い国」というクリシェが頭をよぎる。実際、夏休みに日本へ遊びに行った教え子に「日本の何が印象的だったか？」という質問をしたところ「バスの運転が素晴らしかった」と返ってきた。

スピーカーの音は割れて聞き取れず、今自分がどこに連れて行かれるのかも判らない、話しかけようにも気の荒いバスの運転手は恐ろしい、こうなったら手摺に必死で掴まりながら、もう笑うしかない。おそらくバスの中で只一人の「異邦人」である私は、夜の闇を突っ走る弾丸のようなバスの中で、何故か心地よい「解放感」さえ感じた。私が「異国」を最も感じたのは、バスの中でだった。あのバスはもしかすると「韓国」という名前だったのかも知れない。